

こらっせ便り



2020年1月20日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008、 eメール : info@korasse-kanagawa.org

Web サイト : <http://korasse-kanagawa.org/>

**「支援は人のためだけでなく自分のためです」
人間は一人では生きていけないのです**

福島子ども・こらっせ神奈川

代表 山際 正道

今年も「福島子どもこらっせ神奈川」の活動が始まります。過去8回に及ぶ活動は、福島の子どもを神奈川県山北に招いて学習と地元との交流、横浜での散策を行う「リフレッシュプログラム」や大学生スタッフ町の児童館支援なきました。神奈川うな活動を行って3月に東北地方をそれに続く原発事の問題、つまり人いけない社会的存に立っているから



2019年 リフレッシュプログラム

による福島県栢葉ど多彩に展開しての私たちがこのよいるのは、2011年襲った地震・津波と故の問題が、みんなは一人では生きて在であるとの認識です。私たちは、失

われた日常生活を取り戻すことに力添えをすること、特に現地の子どもたちの健康と学習を支援することに取り組んできました。

私たちの取り組みは、現地の人々に受け入れていただき、それなりに役割を果たしてきていると思います。しかし、地震・津波災害による被害も見た目の復興が進んだとはいえ、人々の日常は、まだまだ安心して生活できるものにはなっていません。特に収束の見通しも定かでない原発事故が、将来の展望を見通すことのできない状況を作っています。

これらの現地の事情からみても、引き続き福島の子どもたちへの支援が必要と考えています。私たちはこの認識に立って、この活動を多くの方々のご理解とご協力を得て続けて行きたいと思っています。私たちのこの思いをご理解いただき、引き続き「福島子ども・こらっせ神奈川」の活動にご協力くださるようお願い致します。

2019年8月19-20日（樫葉町）

こらっせユース、夏休みに児童館支援！！

自然を体験

初めての児童館応援で、初めて会う子どもたちばかりでしたが、リフレッシュプログラムの時に関わった子をはじめ、みんなといつのまにか打ち解けていて自分でも驚きました。

1日目は、東京大学企画の実験に参加させていただきました。外に出てセミの抜け殻を採集して観察をしたり、海岸に行って地層の観察をしたりしました。最初は触るのも嫌がっていた子もしっかりと観察していて、とても興味を持って参加していました。また、地下水を汲み上げたものに触ったり、舐めたりと実際に手に触れることができ、とても貴重な体験をさせていただきました。

2日目は、料理教室でカレーライスとポテトサラダを作りました。低学年の子は初めて包丁を持つ子もいましたが、高学年の子がよく面倒を見ていました。特に、調理で同時に他の作業をする際に臨機応変に動き、まわりをよく見ながら動いているなど感心しました。

帰り際にはお手紙をもらったり、また会おうねと声をかけてくれたりと、私も子どもたちから元気をもらいました。子どもたちの中に私たちと過ごした2日間が良い夏休みの思い出となっていればとても嬉しいなと思います。次回の児童館応援も楽しみです。(大淵 桜子)



感動！僕のこと憶えてくれていた

私は児童館支援に参加するのが今回初めてだったので、正直何をすればいいのかなどほとんどわかりませんでした。先輩方や児童館のスタッフの方に言われる通り行動していました。もう少し自分で何をすべきなのか考え、受動的ではなく能動的に動くべきであったと反省しています。

しかし、そんな反省を忘れさせてくれるほど、子供たちと触れ合ったり話したり遊んだりするのが、とても楽しいものとなりました。というのは、この児童館の活動の前に行われた「リフレッシュプログラム」で交流したたくさんの子供たちと再会できたからです。長谷川兄弟をはじめ、様々な子供たちが私のことを憶えてくれていたので、さらに仲良くなれたなと思いました。また、初めて出会った子供たちともスムーズに交流ができました。今回の児童館の活動を通し、感じたのはやはり楽しさが大きかったです。

自分が能動的に動けなかったという反省も活かしながら、次回行く時は今回以上に楽しみたいと思います！（山口 晴大）

一緒に作ったカレーは美味しかった

児童館支援への参加は今回で2回目です。初めて行ったのが3月で、それから5か月近く経ち、子どもたちは私のことを覚えてくれているのかという不安はありました。しかし、驚くことに自己紹介の時、「僕のこと覚えている人！」と聞いたところ、3月に参加してく



れた子は全員手を挙げてくれました。ほっとしました。

1 日目は東京大学企画の実験に参加しました。内容はセミの抜け殻観察、海岸の地層観察というものでした。子どもだけでなく大人も勉強になることばかりで、アブラゼミとミンミンゼミの見分け方やセミはカメムシの仲間であるということなどを教わりました。

2 日目の料理教室では、オリジナルカレーライスとポテトサラダを作りましたが、学生が担当する

過程でかなりてこずり、日ごろから料理していないことが露呈するシーンもありました。でも子どもたちと一緒に作った料理はとても美味しかったです。

なによりも嬉しかったのは、お別れの時に子どもたちからもらったお礼の手紙です。児童館支援に参加して本当に良かったと思いました。次の児童館支援も楽しみです。

（佐藤 聡）

人間的な成長を感じる

私にとって檜葉町・児童館応援は、5 回目の参加です。天神岬でセミの抜け殻を採取し観察したり、地層や温泉から地質についての観察は、身近な自然の中で積極的に遊びながら学ぶ様子を見ることができたと思います。

調理実習は、檜葉町の食育改善委員会の方々だけでなく、味の素の「赤いエプロンプロジェクト」のみなさんといっしょに行いました。比較的低学年が多く、刃物、火を用いた実習でしたが、高学年の児童がまわりをよく見て支援している様子が伺えました。多くの機関が東北を訪れ子ども達に対して様々な方法で応援を行っていることを知り、しかもその活動に参加させていただき大変勉強になりました。

また3年前に初めて会ったときは低学年だった子は中学年に、中学年だった子は最高学年となった子もいましたが、人間的な成長を感じることができました。これからも彼らと関わっていききたいなと切に思いました。（熊谷 健太）

保養への支援と子供達の健康問題で省庁交渉

原発事故後、いまだに「原子力非常事態宣言」が出されたままの福島県では、避難指示が次々と解除され、帰還政策が進められています。そのようななか「保養」は、ますます必要性を増すのではないかと思ひ、こらっせを含む「いのち神奈川」は2019年11月11日、衆議院議員会館で恒例の「省庁交渉」を行いました。

参加者は、いのち神奈川8名、神奈川への避難者2名など。対応した省庁は環境省・文科省・原子力規制庁・復興省・国交省でした。

補助金支給条件は

4泊5日に緩和

一つ目のテーマである「保養」に関する「ふくしまっ子自然体験・交流活動支援事業」について、

文科省から平成30年度の実績として補助件数4件（すべて対象は「社会教育団体」）で、一部県外の民間団体との協力のもの。行先は千葉・東京・京都・兵庫。31年度の申請見込み数は1件で行先は沖縄とのことです。

なお令和2年度予算要求額は167億円。県外団体にも支援してほしいという要望については、従来通り福島県内の団体との関係性をつくる必要があるという回答でした。唯一の進展は、補助金の支給条件が6泊7日以上から4泊5日に緩和されたことでした。

「学校での集団検診の縮小・中止は考えていない」と回答

二つ目のテーマは「福島の子供達の甲状腺癌の多発」の問題です。公表された現在の子どもの患者数は231人（2019年10月）ですが、この裏には経過観察の中で、実際には経過が把握されていない子ども（約2900名）の中に隠れた患者がいるのではないかと、また親の同意が得られないまま検診も受けられない子供達が（6万7000～11万名余）取り残されているのではないかと、という強い懸念にもとづくものでした。

福島県内には、甲状腺検査評価部会による根強い「過剰診断論」があり「有病率が数十倍高いが、被曝との関連性は認められない。不安を与えて心の負担となる。学校の集団検診を縮小・中止すべき」「風評被害を助長させ復興の妨げとなる」という風潮がぬぐえません。

しかし、今回の交渉の中で、「検診を受けるように啓発に努める。学校での集団検診の縮小・中止は考えていない」（市川環境省放射線健康管理参事管補佐）との言質を引き出したのは、大きな喜びでした。

また、避難者からの「全員の検診を～」 「20ミリシーベルトの所へ住まわせないで」との声は悲痛でした。（事務局 錦織 順子）



<こらっせユース学生ボランティアの活動特集>

こらっせユースの活動は年々幅を広げています。昨年秋には山北町立三保小学校の運動会、法政大学で行われたユースフェスティバル、東日本大震災復興支援まつり、そして山北町での丹沢湖ハーフマラソンへの参加です。参加を通じて多くの人と交流し、その中から学び、活動への教訓を得ました。

地域ぐるみの三保幼小運動会に参加

9月23日（土曜日）、山北町立三保幼・小合同運動会が開催され、私たち学生（和泉・正田）も参加・見学させていただきました。雨天が心配されましたが、児童が作った大きなてるてる坊主たちのおかげか、当日は晴天の下行うことができました。

運動会には小学校の児童とその保護者の方々、先生方の他にも、地域の方々が多くいらしていました。私たちが知っている運動会と違うところは、地域の方々も積極的に競技に参加しているということでした。また、幼・小合同運動会なので、幼稚園児の競技や演技、親子競技なども一緒に行っていました。

ユースの全力疾走に熱い声援

9時30分頃に三保小学校に到着し、初めに先生方にご挨拶をしました。それから12時まではオープン競技に飛び入り参加したり、応援をしたり、児童の演技を見たりしました。三保っ子に会うのは、和泉は初めてでしたが、元気で活発な印象を持ちました。人数は少ないのですが、仲がよく本当に温かい雰囲気为学校でした。2人で1000メートル走に参加しました。正田がスピードを上げると、児童の応援は大きな盛り上がりを見せてくれました。



児童8名で行ったダブルタッチの演技は本当に素晴らしかったです。難しい技も多かったのですが、低学年も高学年も一生懸命練習したことが伝わってきました。少人数だからこそ、一人一人がより輝ける発表ができたのでしょうか。リレーには先生方も参加していましたが、走る人によってコースの距離を長くしたり短くしたりと工夫されていて驚きました。

お昼には三保弁当をいただきました。一つ一つが手作りで、とても丁寧な味付けでした。素材選びからしっかりと行い時間をかけていることが、味を通じて伝わってきました。どこか懐かしい三保弁は、もう一度食べてみたいと思います。

種目が少ない関係で13時ごろには終了したのですが、片付けも児童が進んで行って、さすがだなと思いました。大人も子どもも一緒になって頑張り、応援するという経験はなかなか人数の多い小学校では味わえません。少ない人数だからこそできる地域全体としての盛り上がりや、体験することができました。

運動会直後の10月1日に、三保小学校は'21年4月に川村小学校に統合されることが決定しました。今年は「三保小学校」としての最後の運動会になると思います。もっと多く

の大学生が参加し、「こらっせチーム」として最後の運動会を盛り上げられたらと思います。
(和泉 百香・疋田 翔己)

ユースフェスティバルで大学生と交流

「大学生になったら参加したい」という高校生も

11月16日に法政大学で行われたユースフェスティバルに、こらっせのブースを出しました。ブースでは、興味を持ってくださった方々に、ブースに貼った写真を見てもらいながらこらっせの活動を説明しました。また、チラシを渡してウェブメディアの宣伝もしました。その場でツイッターのアカウントを探してくださる方など興味を持ってくださる方がいたことが嬉しかったです。

児童館支援の話聞いてくださった方の中に、現在の福島の様子について熱心に尋ねてこられる方がいました。震災直後は福島でボランティアをしていたという方で、活動から離れても被災地を心配していることがわかりました。他にも同じ様な方がいるのではと思います。活動を宣伝し応援を募ることは重要だと感じました。

また、高校生も多く参加しており、こらっせの活動を聞いた高校生が大学生になったら参加したいと言ってくれたことも印象的でした。

私たちはブースでの説明の他に、近くのブースや似たような活動をしている団体のブースを回って、そのブースの方々と交流しました。一緒に参加したユースの一人は、同年代で活動している他の団体と繋がれたこと、興味を持ってもらったことが印象的だったと話していました。同じような思いでそれぞれボランティア活動をしていて、その人たちが自分たちの活動に興味を持ってくれて、意味ある活動だと言ってくれて嬉しかったと言っていました。(吉本 海聖)

サヘル・ローズさんの話を聞き、生き方考える

最後にサヘル・ローズさんのお話を聞きました。いじめや夢についてなどを高校生との対話形式でサヘルさんの経験とともに話してくださいました。いじめについては、外国と日本のいじめの違いについてから、自分の意見を持ち、それを言葉で表現することが大切であること学ぶことができました。

また、サヘルさんの学ぶ姿勢は私も見習わなければならないと思いました。自分の興味のある分野について恵まれた



環境で学ぶことが出来ているのは当たり前ではないということを再確認することができました。常に目標を持って1日1日を大切に生きるサヘルさんはとても輝いて見え、私もそのような生き方をしたいと思いました。今の自分にできることは何かを考え、実行していきたいです。(渡辺 美瑠)

復興支援祭りに参加して

「幸せの共有」が大事と実感

12月7日土曜日。通算8回目となる「東日本大震災復興支援まつり2019」が、みなとみらい臨港パークで開催されました。

こらっせも出店し、リフレッシュプログラムや児童館支援の活動報告を行いました。また、出店以外にも、わかめまきで、団体代表として学生の吉本さんがわかめを投げたり、代表スピーチで、事務局の横山さんが5分に及ぶスピーチを行ったりと、積極的に関わらせていただくことができました。

「被災地支援」から「暮らしの足の支援」

私は復興支援まつりで交流した3つの団体を紹介したいと思います。一つ目は「移動支援 Rera」です。Reraは、石巻地域で住民の方々を避難所から送迎する活動を行っていた移動支援の団体です。現在は、現地のニーズの変化に合わせて「被災地支援」から「暮らしの足の支援」へと活動を移行しているそうです。スタッフの方が熱心にお話をしてくださり、石巻の津波被害の甚大さ、復興に向けた軌跡を学びました。



二つ目は、「母ちゃんず」です。福島の子どものお母さんを対象に保養キャンプを行なっている団体で、スタッフの方とお話しして特に心に残っていることは、主催側が良かれと思って開催日程を長くしたところ、それが負担となったある参加者の方から「私たちの気持ちがあなたたちにはわからないでしょう」と言われたという話です。良かれと思ってしたその善意が、受け手から

したら良く思えないこともあるということです。復興支援をしていく上で、気を付けたいことだと思いました。

三つ目は、「AWS学生アカペラプロジェクト」です。AWSは、Always With Smileの略で、気仙沼市に月に一回足を運び、アカペラを披露しています。全国の大学のアカペラサークルの有志で活動しているそうです。私たちこらっせも、複数の大学からの学生で構成されています。アカペラサークルも同じような取り組みがあることを知り、なんだか嬉しくなりました。

優しさを寄せ集め、自分たちのできる形での支援

復興とは何なのだろうか。ある人は「その人が復興したと思えた時にやっと復興したと言えるのではないか」と言いますが、被災地の方々にとって被災した傷はずっと癒えることはないのではないかと私は思います。

その中で私たちができることは、こらっせや、今回紹介した方々のように、一人ひとり

がほんの少しでいいから、優しさを寄せ集めて、自分たちのできる形で支援していくことではないかと思います。幸せだなと感じてもらおうこと。一緒に幸せを共有すること。それが「復幸」につながると思う。(岩成 銀河)

きれいな紅葉と

青い丹沢湖の 10km レース

2019年11月24日、第41回丹沢湖ハーフマラソンが山北町で開催されました。こらっせでは毎年行っているリフレッシュプログラムで山北町の施設などを利用させていただいたり、山北町立三保小学校の子どもたちと一緒に遊んだり、山北町の皆様には大変お世話になっていることもあり、今回のマラソンに私がこらっせの代表として参加することになりました。



当日の朝は雲行きが怪しく少し小雨が降っていたのですが、マラソンがスタートする頃にはすっかりきれいな青空が広がっていて、丹沢湖のほとりの紅葉した木々たちがより一層美しく、まさしく絶景というにふさわしい景色でした。

マラソンのコースも、この絶景が楽しめるように設定されていたため、美しい景色に癒されながら大変気持ちよく走ることができました。マラソンのゴール地点では、リフレッシュプログラムで毎年一緒に遊んでいる三保小学校の子どもたちが、「お疲れさまでした」と言いながらスポーツドリンクやみかん、バナナなどを参加者に配布していました。その中には2年前に私が担当した活動班の子どもたちもいて、声をかけることはできなかったのですが遠目ながら成長を感じて、とても懐かしくほほえましく思いました。

マラソンの結果にはあまりこだわりはなかったのですが、あの絶景が力を貸してくれたおかげか、なんと女子29歳以下の部で6位に入賞！湯川町長に表彰していただき、賞状に加えて立派なトロフィーまでいただきました。丹沢湖のほとりを走ることができただけでも非常に良い思い出となったのですが、マラソンを走り終えてからも良いことばかりでした。

参加者全員に無料で提供をしてくださっていた名物の獅子汁が本当においしく、さらに、地元の農産物や名産品、グルメなどを楽しむことのできるブースもあり、完走後にゆっくとショッピングを楽しんでしまいました。

また、マラソン参加者には近くの中川温泉の割引券が渡されていて、走った後の疲れを秘境の温泉で癒すことができました。中川温泉に向かう道中では、地元の方にミカンをたくさん分けていただき、地元の方々の温かさがとても身に沁みました。絶景の中で走ることができただけでなく、山北の魅力をつっぷり堪能することができたため、改めて参加してよかったなと感じます。もし来年も機会があればぜひ参加したいなと思います。

(加藤 柚菜)